

# 長久手町の文化財 十四

## 町指定文化財(一) 前熊の山車

はじめに

前熊地区に「やまぐるま」「お天王ぐるま」「ちようちんぐるま」と呼ばれる、古い一台の山車があります。

これは、江戸時代から、前熊村の天王社(津島神社)のお祭りでも引かれるもので、いつもは多度社境内の山車蔵に納められていますが、現在は老朽化が進み、危険なので村内引き回しはしていませんが、毎年七月のお祭りの日には、例年どおりに赤い提灯を点し、緋の幕を垂らして、祭りの主役となります。



照り起り



照り屋根



起り屋根

「図説歴史散歩事典」山川出版社刊

江戸時代中期の製作

山車の大きさは、梶櫓の長さ五〇九センチ、胴山は二一五×一三八センチの箱形、尾根の高さは四八六センチです。胴山と呼ばれる中心部の上には高欄がめぐり、その下の飾りに、竜の丸彫りの彫刻が施されています。屋根は、障子に油紙を貼った雨障子の起り山根で、周囲にはさらに、雨除け庇の雨障子が出ています。

構造、装飾、用材などは、単純質素で、ふだん、見聞きする京都の祇園まつりや高山まつり、名古屋まつりの山車とはずいぶん違っています。素朴で軽量に仕上げられた前熊の山車は、型式や使用材の古さから、江戸時代中期の製作であろうと推定されています。

前熊のお天王まつり  
お天王まつりはいまでもなく、牛頭天王を祭神とする津島神社のお祭りです。牛頭天王は、痘瘡や疫病など流行や病を防いでくれる神なので、祭りの規模に差はあれ、前熊に限らず、どこの地域でも行われます。ことに前熊は天王信仰があつく、祭りの規模も大きく、今日まで続いたということの裏には、中世末期から近世初頭にかかる、前熊村の近世集落発生につながる信仰と結びついていたこ



▲高欄の下の竜の丸彫り

とによるで(一五七七)に、時の前熊寺住職の良椿和尚が、前熊寺鎮守のためた、その昔、山車を出さなかつた年、村にチウが、現在の山車に、赤痢が点した山車を引き、その高欄で山流し、多神楽を奏で、打ち囃子太鼓を打ち鳴らして、村内を引き回す(現在は行われぬ)という形が行われるようになったのは、一体いつごろのことなんでしょうか。

前熊のお天王さんは、天正五年(一五七七)に、時の前熊寺住職の良椿和尚が、前熊寺鎮守のためた、その昔、山車を出さなかつた年、村にチウが、現在の山車に、赤痢が点した山車を引き、その高欄で山流し、多神楽を奏で、打ち囃子太鼓を打ち鳴らして、村内を引き回す(現在は行われぬ)という形が行われるようになったのは、一体いつごろのことなんでしょうか。



▲前熊の山車



▲お天王まつりの風景

今年の天王まつりは、七月十二日(日)に多度社境内で行われます。

註一 「前熊寺鎮守天王由緒書」の内、奉願上儀事(明)